

つながり，かさなり，ひろがる授業 ～12年間の「知」の構築を目指して～（1年次）

研究部

はじめに

本学附属池田地区における共同研究も今年度で3年目を終えようとしている。当初は、3校種の共同、大学との連携ということで課題もたくさんあったが、年を重ねるごとに我々の研究は、着実に前進していると確信している。昨年11月には、池田地区附属学校研究大会が行われ、今年度もそこで得られた成果や課題を顧みながら、今回の研究紀要第52号の発刊に向かった。

今年度より、取り組み始めた「つながり，かさなり，ひろげる授業」について簡単に説明したい。平成23年度より小学校で、平成24年度より中学校で、また、平成25年度より高等学校で新学習指導要領が完全実施された。改訂の主なポイントを見ると、「生きる力」を前面に掲げているが、これは、生徒の現状に合わせた教育基本法の改正が大きなカギとなっている。文部科学省の言う、単なる「ゆとり」ではなく、当然、「詰め込み」でもないこれからの教育とはどのようなものであろうか。それは、真の「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力の育成が望まれるものであろう。基礎的・基本的な知識・技能の習得だけではなく、その両方が必要なのである。

我々は、昨年度まで、思考力・判断力・表現力を養うため 言語活動に特化した内容で研究を進めてきた経緯がある。言語活動の充実を図るということで、研究を重ねた結果、次のようなことがわかった。言語活動は、自己との対話、他者との対話、テキストとの対話が必要であり、これは、まさに思考・判断・表現力の育成につながるということである。また、この研究では、言語活動のマトリクスの開発を行なった。マトリクスを用いることにより、発達段階に則した言語活動が容易に理解でき、小中高の校種を越えた重層的な学習活動の過程が明確になったと言える。

しかし、真の「生きる力」を養うためには、言語活動だけに特化した内容では、少々限界があった。そこで、われわれは、知識や技能の習得から思考判断表現といった力を総合的に身につけさせる必要があると考えた。このようにこれまでの研究をもとに、「生きる力」に必要な知識・技能の習得、そして、思考力・判断力・表現力を身に付けさせる最善の方法とは何かにもう一度立ち返り、今回のテーマに辿り着いた。

1. 「つながり，かさなり，ひろがる授業」とは

我々の考える「つながり，かさなり，ひろがる授業」とは、系統性と階層性をもった質的量的に優れた授業のことである。すなわち、我々附属池田地区の教育課程において行われる授業は、各学年での各教科・領域におけるつながり，かさなりを重視したものでなくてはならないと考える。

図1は、中学校をモデルにした「つながり」と「かさなり」を表したモデルである。例えば、国語と理科、道徳と体育の連携であったり、各教科・領域が互いの学習内容を把握し合いながら、つながりと重なりを把握することが大切である。学習内容を互いに理解し合うことは、教師間のつながりといえるだろう。また、これには、生徒同士のつながりも必要となる。そこで、はじめて相互的に作用し合える連携の取れたカリキュラムを築くことができることになると考える。

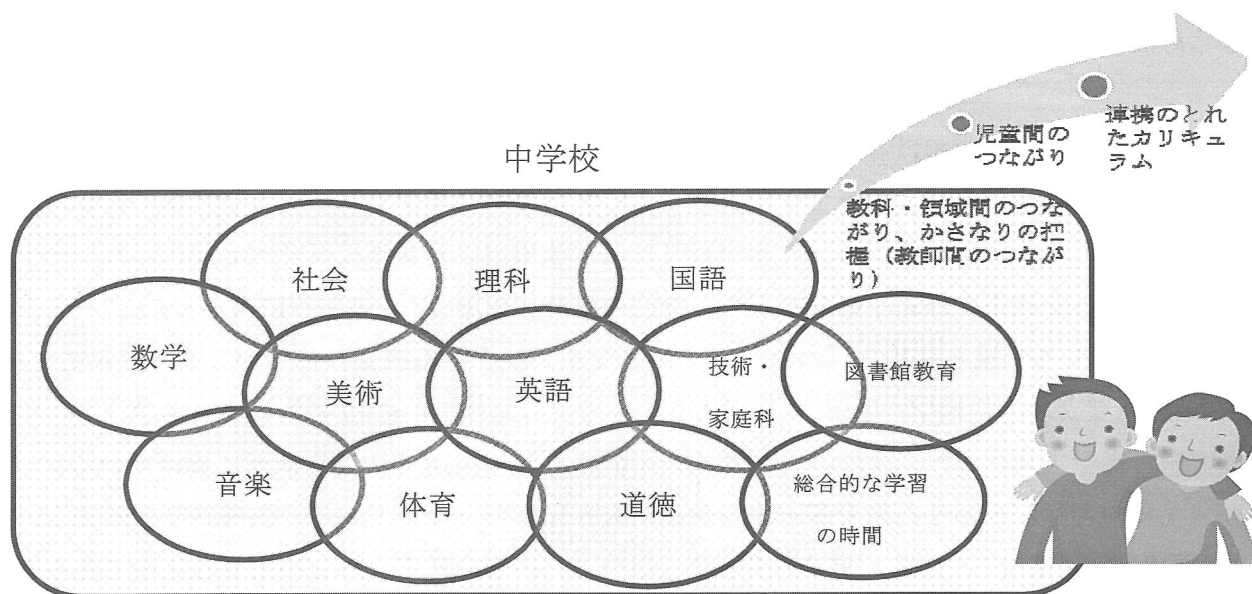


図1 教科・領域におけるつながりとかさなり

図2に示すのが、各教科・領域における「つながり」と「かさなり」、そして、「ひろがり」について、社会科をモデルにし、示したものである。各教科においては、各校種の指導内容にかさなる部分が存在し、切れ目のない連続したカリキュラムになっていなくてはならない。これは小学校の6年間、中学校の3年間、高等学校の3年間でも同じである。すべての教科の指導は、それぞれが連続した系統性のあるもので必要がある。これらが、つながりとかさなりを持つことによってより高次な内容の深まりが生まれると考える。

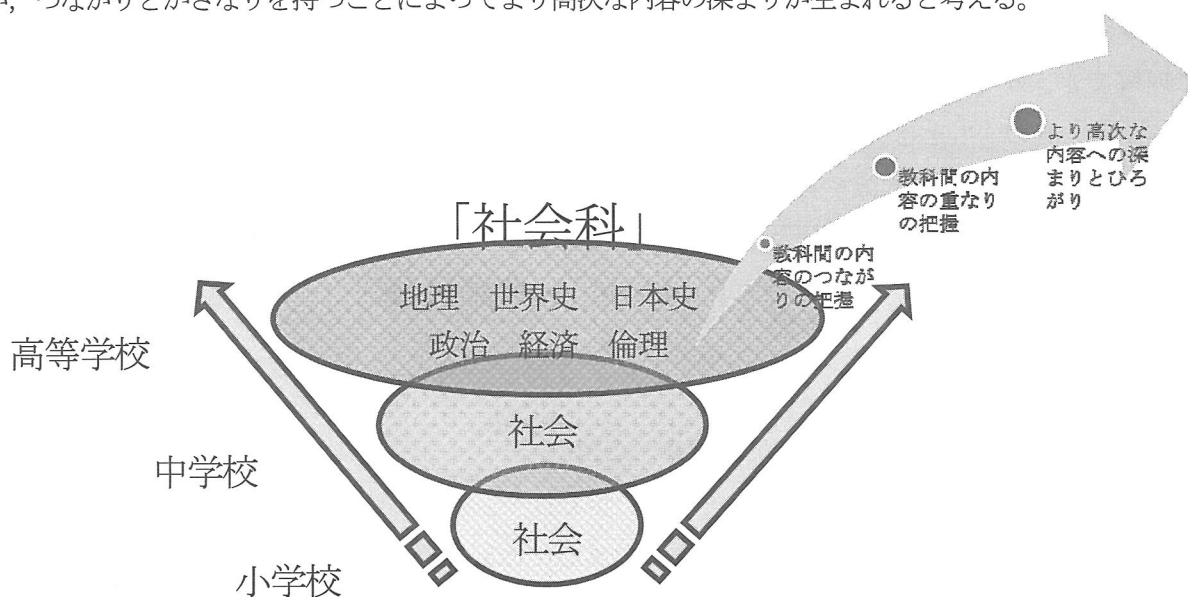


図2 教科・領域におけるつながりとかさなりとひろがり

図3に示すのが、本池田キャンパスにおいて12年間で行われる、我々のイメージする各教科・領域の階層性と3校種における系統性のとれたカリキュラムの全体像である。系統性と階層性のある授業提案こそが、児童・生徒の興味関心をひろげ、将来における児童・生徒の自己実現のはばをひろげていくことになると思われる。効率的で質的にも優れた授業を行うことは、カリキュラムの精選にもつながる。しかし、気をつけなくてはならないこともある。重なり合う部分については、重複するので単に省くという考え方ではなく、その内容を十分に考慮し慎重に進めなくてはならない。要するに、重要であるから重複する、頻出する、ということも言えるからである。大切なのは、お互いその内容に着目し、発達年齢に応じた様々な視点より迫る必要があるということである。このような内容の精選や重点化は、各校種における教科間のつながりができて初めて、吟味できることである。その部分を大切に考えればさらなる活動の場を生み、各単元におけるより高次の深まりとひろがりが可能となると考える。

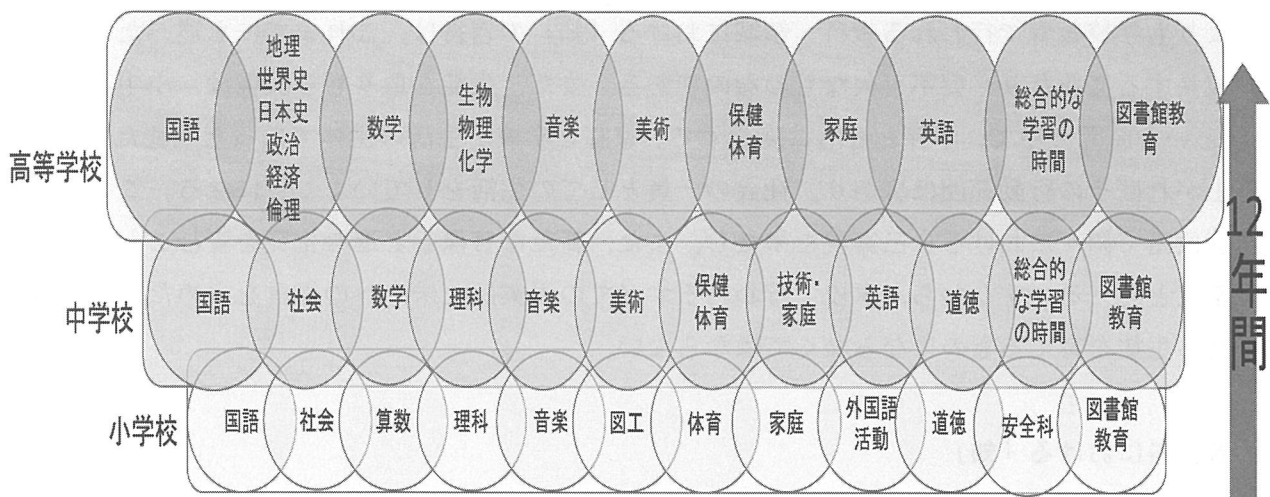


図3 12年間のカリキュラム全体像

2. 「知」とは

本校の提案する12年間の「知」とは、総合的な「知」の能力である。単なる知識や技能ではなく、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、課題解決力、他者と関係を築く力、豊かな人間性などが総合的に育成される教育の創造である。よって、各教科・領域における「知」とは、それらの本質となるものである。

知とは・・・

自己実現に向けた児童・生徒が知るべき、行うべき、獲得するべき知識や技能，課題解決力，豊かな人間性，態度などであり，各教科・領域の本質となるもの

ここで身に付ける「知」は、そこから他教科・他領域へ、そして、将来の自己実現に向けた礎となる力へと広がっていく。それらを示すのが図4である。

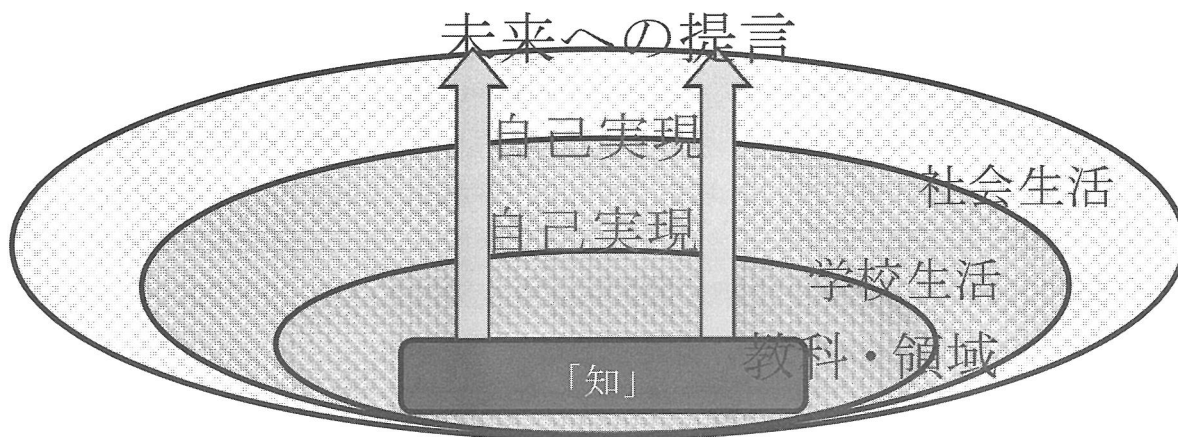


図4 12年間の「知」の構築をめざして

何よりも学校教育で行われる教科・領域における「知」の習得は、これまでも述べたように生徒が成長するにあたり必要不可欠なものなのである。また、生徒を取り巻く環境は、小中高という12年という時間の中で、学齢とともに変化する。家庭と学校が生活の主体であった生徒たちは、学齢が上がればその行動範囲は広がり、社会の一員としての生活をしていくことになる。このように各発達段階で個々における自己実現を果たし、また、新たな目標へと進む生徒を育むことが本校での役割だと考える。すなわち、本校で行われるすべての授業は、未来への提言を含めた自己実現を果たせる生徒を育てるものにならなくてはならない。

3. 各教科における「知」

次に本年度、我々の考える各教科・領域における「知」について示すこととする。

教科	教科における「知」
国語	情緒力を伸ばし、心情を理解する力、論理的に判断し、表現する力 伝統を現代に活かす力
社会	多面的・多角的な見方・考え方の獲得を通じた、歴史叙述への価値判断・ 意思決定を行うことのできる能力
数学	数学的な思考力・数学的な表現力・数学的な判断力・数学的な活用力
理科	「科学的な自然観」とその育成に携わる様々な能力
音楽	学力の基礎・基本と考えられる、知覚・感受したことをもとに、自ら課題 を見つけ、創意工夫し、他者と関わりながら表現する力
美術	感性、直観的表現、価値の認識、価値の表現、責任ある創造、文化の形成、 アイデンティティーの確立
体育	意欲的に仲間と仲良く運動する中で、各種の運動の楽しさや喜びを味わえ るよう自ら考えたり、工夫したりする力
技術・家庭科	家庭・社会生活において、生き抜くための技能の習得のみならず、よりよ い生活に向け、自ら課題を見出し、解決することができる能力
英語	相手の意図を理解し、その理解した内容を自分の言葉で表現することがで きる力
道徳	自ら直面する状況において、他者には個々に様々な道徳的価値判断が存在 することを知り、自らの自覚において経験をもとに判断する力
総合的な学習の 時間	自己を知り、他者を受け入れ、関係性の中で課題に取り組み積極的に生き てゆく力
図書館教育	情報を活用して問題解決する能力

分の目的や理想の実現に向け努力し、それを成し遂げることである。要するに、我々は、将来に渡り本校生徒が目的を持ち、それに向け努力する態度を身に付けさせなければならないと考える。それを実現するための手段が、系統性と階層性のとれた授業の構築であると考えている。

5. 成果と課題

今年度は、主題「つながり、かさなり、ひろがる授業」、副題「12年間の「知」の構築をめざして」として、前年度までの3ヶ年の研究を発展させた、より継続性・発展性・具体性があるものをめざし研究を行ってきた。しかし、その中で1年次ということもあり、研究テーマについての内容の周知徹底という意味では、課題が残る部分もあったことをまず付け加えておく。

主題に関して、「つながり、かさなり、ひろがる授業」という比較的わかりやすい内容であるため、これまでの積み重ねである小中高連携という点で一体感が得られたということを成果としたい。各教科・領域が「つながり、かさなり、ひろがり」を意識し、授業提案を行なったため、連携を十分感じさせる内容になっていたといえる。池田キャンパスとしての研究活動に対する連帯感、一体感の深まりが感じられる1年であったと言え、主題に関して、2年次以降のさらなる発展が期待できる。

一方、副題である「12年間の「知」の構築をめざして」について、「知」とは、「単なる知識や技能ではなく、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、課題解決力、他者と関係を築く力、豊かな人間性などが総合的に育成される教育の創造」と定義してきた。その解釈について少々混乱があったように思われるが、この副題のもと、今年度は各教科・領域における「知」＝「教科の本質となるもの」＝「目指す児童生徒の姿（「知」を身につけている）」として各教科が設定をおこなった。今回設定した「知」については、それぞれの教科・領域内だけではなく、他教科・領域においても池田キャンパスとして目指すべき生徒の姿を共有する手がかりとなった。

課題としては、2年次を迎えるにあたり、3年次に向けた評価を意識した授業提案でなくてはならないと考える。その意味で「つながり、かさなり、ひろがる」という池田キャンパスとしての共通のものさしが必要になるのではないかと考える。例えば、教授法などを研究部より大きな枠組みで提案し、それらを取り入れた形での授業提案を行えば、3年次へのスムーズな研究の移行が可能になると考える。また、今年度の課題として次のことも挙げたい。主題に大きくかかわることで、校種間の各教科・領域における「溝」や「節目」を明らかにすることである。小中高連携に取り組んでいるということは、つながりやかさを把握し、学習内容をより効果的に教授することである。これまでの6-3-3制では、どうしても内容や単元により、つまづきやすい箇所（溝）が存在していた。つまり生徒が内容について消化不良を起こしていても、それについては校種が変わればどうすることもできなかった。そこで、我々は、「溝」の部分については、連携をとり、より丁寧に重なりを持たせて学習させ、そして、理解が容易い部分については、ここまでは教え、次につなぐという「節目」の部分を明確にする必要があると考える。このような点を課題と捉え、来年度は、今年度の反省をもとに2年次の研究に向かいたい。

また、図5に示すのが我々の目指す生徒像であり、すべての教科・領域における「知」を身につけていることがわかる。「知」の内容については、このように各教科・領域における本質と捉えるポイントは様々であるように見える。しかし、これら一つ一つをよく見ると、「国語の物事を論理的に判断する」であったり、「社会の歴史叙述への価値判断・意思決定」であったり、「道徳の自らの自覚において経験をもとに判断する力」であったりと、様々な知識・経験をもとに判断力を育成しようとするものが含まれている。

他にも、いわゆる思考力を「知」とするもの、表現力を「知」とするもの、課題解決力を「知」とするものなどがある。このように各教科・領域で大切にする「知」には、いくつかのかさなりがあることがわかる。

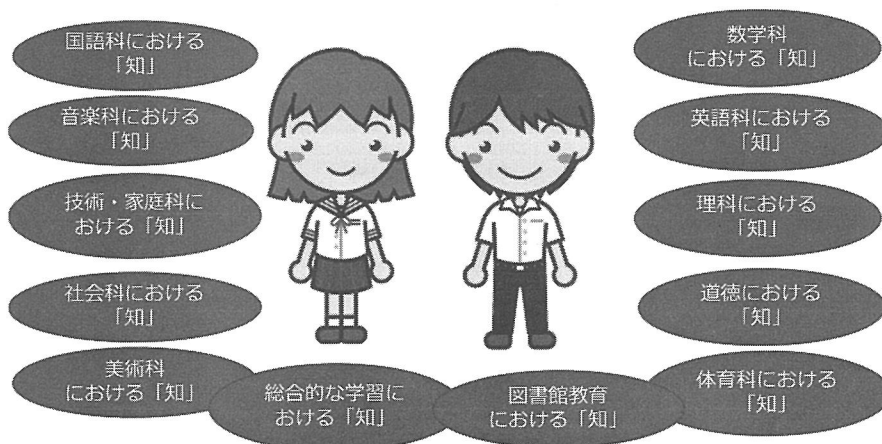


図5 目指す生徒像

このかさなりを互いの教科・領域間で共通認識しあうことが大

切であり、それこそが、今回の研究の本質的な課題となる。重なり合う部分については、重複するので単に省くという考え方ではなく、その内容を十分に考慮し慎重に進めなくてはいけない。要するに、重要であるから重複する、頻出するというとも言えるのである。逆に言えば、お互いがその内容に着目し、様々な視点より迫る必要がある。このような内容の精選や重点化は、各校種における教科間のつながりができて初めて吟味できることであろう。我々は、是非その部分を大切に考えたい。

4. それぞれの「知」から見えるもの

これまでに書いた各教科・領域における「知」の重なりを取り出してみる。各教科・領域の「知」を見ると大まかに図6のようなものがあり、さらに、めざすものが重複する場合が多々ある。これらのかさなりを互いの教科・領域が把握しあうことが先にも述べたように重要である。互いに強め合い、時には、補い合いながら各教科が一人の生徒を育てる。その形が自己実現であると考えられる。自己実現とは、自

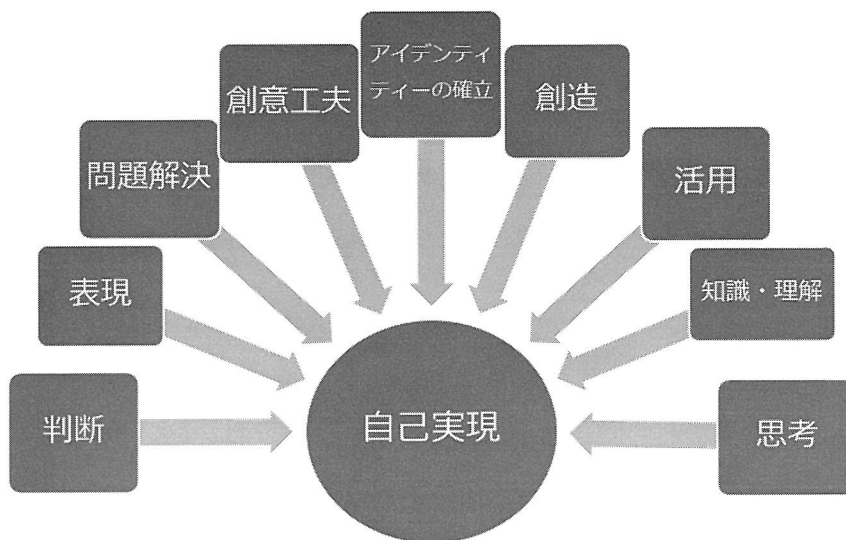


図6 それぞれの「知」から見えるもの